

ミスターフェイト

山中與隆 Yamanaka Tomotaka



中国山地越え2週間徒歩旅
行・・

―雨空下のずぶ濡れ漫遊記

―落ちこぼれ死神ミスター

フェイトとの闘いに勝利

―余命20年を確保

―寿命は丁度2021年ま

で

旅の途中の悲話2短編別冊

・袖ふれあうも

・けんか

Duo-Yamanaka

ミスターフェイト

山中與隆

目次

ミスターフエイト 1

人の運命はすべて神々の手中にある 1

太郎の身の上話 6

ミスターフエイト登場 52

徒歩旅行リターンマッチ 69

死神との戦いの始まり—飯室の難所

ゆとり道中—千代田町を行く 104

中国山地越え山陰沿岸へ 121

日本海沿岸を西へ 125

青海島の戦い 142

旅行も終盤—油谷温泉へ 176

鉄道で広島へ 202

死神、太郎計画断念 209

寿命は丁度2021年まで確保!!

編者あとがき 226

217

ミスターフエイト

作 山中與隆

人の運命はすべて神々の手中にある

人の運命はすべて神々の手中にある。神々にとつ

ては、なにしろ世界の人口六十億人すべての運命を司るのだから大変なことである。しかも人口はこの十年で十億近くも増加しているのだから、人間を管理する神のグループは大変な過重労働を強いられてゐる。それでも何と云つても神であるから、少々のことは乗り越えながらたいていは自らの役割をなんとかこなしている。『こなしている』と言うのはあくまでも神の側の言い方であつて、運命に翻弄される

側の人間にとってはいちいち理不尽に思えたり、悲
惨に感じられたりして大騒ぎになることが稀ではな
い。

この世に生を受けた人間は、どのように生きそし
ていつどのようになその生涯を閉じるのか。この誰に
も答えられないことを、実は自由自在に操っている
存在があるとしたら、その操っている仕事場を覗い

てみたいものである。

人間はそれを運命といたりして、人間の力の及ばないこととして諦めている。しかし注意深く見渡すと、諦めているばかりではなく生命科学や医学の分野では運命への挑戦が続けられている。いくら歳をとっても、あるいは重い病気にかかっても何とか生き長らえる技術を模索しているのである。そしてケースによっては成功を勝ち得ている。また個人レ

ベルでも果敢に運命に挑戦しているかのような感動的な努力の話は枚挙にいとまがない。

この小説は、人間の運命を操作している存在と、操作される一人の男との戦いの物語である。運命を操作する存在、神といえばいいのか運命と言えばいいのかわからないが、とにかく人間と同じように意思と思考力を持った存在である。彼のことをミスタ

ーフエイトと呼ぶことにする。そしてミスターフエイトに運命を操作される男を太郎と呼ぶことにする。

太郎の身の上話

我が愛すべき太郎氏は四十八才である。一人娘はすでに嫁に行つて共働きの生活をしている。太郎は

つい二ヶ月前に会社に嫌気がさして退職し、いまは毎日が日曜日である。とはいっても食っていくために次の仕事を探している。新しい仕事が見つかるまでの間は、しばらく雇用保険のお世話になる。制度の許容範囲いっぱい利用して、少しでも日曜日期间が長いことを願っている。太郎は充電期間と称して、楽しもうとしている。新しい仕事については各方面に声をかけているが、本当に気にいった仕事があつ

た場合にだけ受けようと決めている。

これまで二十五年間やってきた仕事は、仕事の内容としては嫌いではなかったが、なにしろ上下左右の人間関係に疲れきった結果の退職であった。これは太郎に限らず、中途退職の典型的なケースと言つていいだろう。

太郎は自分なりに仕事はこなしているつもりだった。周囲の人たちとの協調性も悪い方ではないと思

っていた。昇進やボーナスの額などから上からもそこそこには評価されていると思っていた。同僚達からは好かれていた方だとも思っていた。

しかし、それらの思いがすべて太郎の勝手な思い込みでしかないことを、突きつけられる事件が、いまから五年前に起きたのである。大変なショックであつたが、それでも初めのうちは悪く取るのは間違っていると思ひ返したりした。しかし周囲の状況を

そのつもりで見ると、やはり自分に不利な判定を裏付ける事柄が随所に認められた。そのうち少しずつ仕事に対する意欲が減退していくのが自分にもよくわかった。風邪で休んだりすることも多くなつた。そして昨年決定的な事件が起きて退職を決意することになつたのである。

会社というものは、自分の都合で辞めるときは退職金の額が大幅に少ない。そういうことは社内規定

として太郎もよく知っていた。雇用保険もそのような退職の場合は、倒産や定年退職の場合よりも厳しい扱いとなる。しかし、太郎はそれらの一時的な不利など眼中にないかのようになり、迷わず辞表を出した。

五年前に起きた事件というのはこうである。

会社のある企画に太郎の提案が採用されることになり、太郎はその企画を成功させるために毎日夜遅

くまで準備にかかっていた。しかし直前になって企画会議にも出ていなかった別の案が実施されることになったのである。太郎は一体どういうことなのか、自分の案がなぜだめなのか説明を求めた。だが、もう決まったことだからと言うだけで納得のいく説明はついに聞かれなかった。それだけでなく、同僚の誰一人として太郎の味方になって抗議してくれる者はいなかった。その新しい案を誰が作ったのかも太

郎には知らされないままだった。

後になつて太郎が漏れ聞いたところでは、太郎がある上司の悪口を言ったのが、本人の耳に入ったのが原因らしいということであつた。そう言われてみると、たしかに太郎はその上司を批判したことがあつた。部下の意見をとりあげず、自分の思いつきばかりを押し付けることを批判したのだつた。『自分の思いつき』というところに『陳腐な』がついていた

かも知れない。

太郎は、そんなことを根に持って仕返しでもしたつもりなのかと腹が立った。そんなちっぽけな人物が上司とは情けないとも思った。

しかしその原因説は単なる噂に過ぎなかつた。本当の原因は、太郎の案そのものにあつたのだ。もう時効になつたくらい月日が経つたころある同僚が、また上層部の考えを陳腐だといつて批判する太郎に、

戒めるつもりで話したことで太郎の知るところとなる。

太郎の会社の社長が大手得意先の部長とゴルフをする機会があり、そこで自社の新しい企画を自慢そうに話したのだそうだ。太郎の提案によるものである。社長とすれば大事なお得意様に大いに期待を寄せてもらおうとしたのであった。しかしその部長は、その企画はすでに他社がやっている二番煎じだとい

つて笑つたという。社長は大恥をかかされて、怒り心頭で社に帰つて調べさせると、お得意先の部長の言うとおりであつた。他社というのは一番のライバル会社であつた。しかもその同じような企画は、あまり評判がよくなくてすでに立ち消え同然だということであつた。

社長からこれを聞いた専務は、早速太郎にやり直させましようと言つた。しかし社長は怒り狂つてい

て、太郎なんか放っておいて、他のやつにやらせろ
と言うことになった。

太郎としては、不勉強のそしりを免れるものではないが、企画会議で誰一人としてそのような指摘をする者はなかった。誰も知らなかったのか、あるいは知っている者はいたが敢えて言わなかったのか、どちらかである。

太郎はこの話を聞いて、企画が没になったときよ

りももつと大きな衝撃を受けた。それは自分自身に
対してであり、その日まで誰も真実を教えてくれる
者がいなかつたことに対してであつた。

そして昨年起きた事件は、太郎に会社を辞めよう
という思いを急速に強めさせた。

それは直属の部下の自殺であつた。

会社には旅行がしたいといつて三日間の有給休暇

の届が出ていた。どこに旅行するのかは訊いた者もいたが、適当な冗談でしか答えなかつたらしい。それで、お忍びの不倫旅行かなどといつて、平凡な日々に変化を期待したような冗談も飛び出した。

四日目その男は会社に出てこなかつた。会社では、旅行で遊びすぎて疲れたのだとか、ついに駆け落ちかなどと相変わらず冗談が飛び交った。そのうち電話があるだろうくらいにみんな軽く考えていたので

ある。ところがその男は五日目も出社しなかつたし、何の連絡もない。太郎はその男の自宅に電話してみた。奥さんが出て、家にも連絡がないという。奥さんは会社の出張ではなかつたのですかと言う。太郎が旅行するといつて三日間の休暇が出ていたという。と、奥さんもびっくりして大騒ぎになった。太郎は午後時間を作つてその男の家に行つた。奥さんが出てきて、気のせいか青ざめた顔で、会社で主人に何

かあつたのですかと太郎に訊いた。太郎がいつもと何も変つたところはないかつたと言うと、奥さんはそのまま黙つた。家にも連絡がないのでどうなつていいのかわからないというので、とりあえず連絡を待とうということにして太郎は会社に戻つた。会社に着くとすぐ、その男の兄という人から電話があつた。弟は死にました、とそれだけを言つてしばらく電話の向こうで無言が続いた。太郎は、突然なので交通

事故かと聞いた。兄という人は、曖昧な発音でそうです、といったように聞こえた。

太郎がその男の机を調べると、いつもは鍵がかかっている引出には鍵がかけてなかった。全部の引出しがきれいに空っぽにしてあり、一番上の引き出しに厚い大学ノートが一冊だけ入っていた。その大学ノートには、その男が担当してきた仕事の引継ぎのようなことがぎっしり書き込んであった。太郎は背

筋が凍る思いがした。交通事故ではない。青ざめた奥さんもあの時すでに知っていたのだ。

自宅から車で数時間の山林で、道路わきに車を置いて、林の中で首を吊ったのである。

太郎はなぜなのか見当がつかなかった。奥さんに会社で何かあったのですかと聞かれたが、会社で悩んでいるようなことを奥さんに漏らしていたのだらうか。最近のその男はむしろ明るいとさえ思えた。

ただ、朝その男の屑籠に缶ビールの空き缶が捨ててあることがあつた。夜遅くまで残業になるときに、合間に夜食を買つてきて缶ビールを飲むことはたまにある。その男は酒好きの方だったが、会社では他の者が飲んでも自分は車で帰るからといって飲まなかつた。太郎はそのことを知っていたので、空き缶を見たとき意外に思ったものだ。机の整理や引継ぎノートから判断すると、何日も前から覚悟していた

ことがうかがえる。缶ビールで気を紛らせながら、夜一人残って引き継ぎノートを作っていたのだらうか。

家族からはもちろん、周囲の誰からも自殺の理由は知らされなかった。しかし噂だけはどこからともなく囁かれていた。それによると、会社とは関係ないことで、あるかかわりに巻き込まれてのつぴきならない事態に追い込まれたということであつた。

一応仕事がらみの原因ではないらしいということ
で、太郎は少し気が楽になった。家族からも会社を
責めるような動きは一切なかった。しかし、死ぬほ
ど悩んでいる部下と毎日一緒に仕事をしていて、最
近は明るかったなどと思っているようでは自分は、
上司としては失格だと思った。この事件で太郎を責
める同僚はいなかったし、上層部としても会社とは
無関係の原因と断定したので、太郎の指導者として

の責任は不問に付された。

しかしこの事件以後、会社の中での太郎はますます疎外された存在になっていった。自分から引いていった面も大いにあつた。

かくして太郎は、心機一転を期すことにして辞表を書いたのである。辞表は遺留されることもなくあつさりとう受理された。年度末の忙しい時期のせいも

あつたが、送別会といつたものもなく、太郎の二十五年間のこの会社での生活はあつけなく終わつた。太郎は何だか追われていくような気持ちにさえなつた。

最後の日、少し残っていた私物をまとめて、「ではこれで、大変お世話になりました」と事務所のみんなに対して挨拶をした。仕事の手を止めて立ち上がって、

「お疲れ様でした」

とか、

「おげんきで」

と挨拶を返した者もいたが、坐つたまままでちよつと会釈しただけの者も多かつた。太郎は廊下に出て、役員室によつて専務に挨拶した。専務は面倒見のいい人物で、太郎にも親切に接してくれていた。専務は、

「垢にまみれていない新しい場所でやり直すのも悪くないと思います。あなたは大丈夫でしょうが健康でさえあれば何でも上手くいきますよ」

と励ましてくれた。専務も、太郎がこれ以上この会社においても状況は好転しないと思っっているようであった。

太郎が駐車場に向かっていると、一年くらい前に入社した女子事務員が、追ってきた。そして、

「お身体に気をつけてください」

と、いって握手の手を差し出した。太郎も、

「あなたがいるからあとのことは心配ないよ。がんばってください」

と、いって握手した。コンピュターに詳しい女性で、いろいろな記録の整理などで大いに戦力になっていたのだ。

この日太郎は、胸が締め付けられるようなものさ

びしさにおそわれていた。昨日まで自分もその中にいたのに、いまは自分とは無関係な世界のように感じられた。そんな中で、専務の言葉と、思いがけない女子事務員の心遣いがあった。

太郎は、帰宅するつもりで車を走らせながらなぜか涙が溢れ出て仕方がなかった。前が見えにくくなつて、何度か車を止めて目をぬぐつた。みんなに暖かく送られなかったのが悲しいのでもない。この会

社で思うように仕事が出来なかつたのが悔しいわけでもない。こんな顔をしてすぐ家に帰るわけにもいかなないと思つて、一時間で着くところをぐるぐる遠回りして、三時間も走り回つてから家に向かつた。それでも信号待ちでぼんやり前の車のテールランプを見ていると涙が出てきて困つた。

家に着くと、ただいまと言つただけで太郎は自分の部屋に入つてしまった。太郎は、ただいまと言う

声が震えていたように思い、妻に何か悟られたのではないかと嫌だった。妻は何かを察したらしく、部屋にも入ってこず、食事に呼んだりもせず太郎をそつとしておいた。太郎は、さすがに家ではもう涙はなかつたが、抜け殻のようにぼんやりと自分が写っている窓の方を見て長い時間ただ坐っていた。一時間もそうしていただろうか、気持ちがち落ち着いてきたので遅い夕食に降りていった。妻と二人だけの普

段どおりの夕食だった。太郎はこの朝出かけるとき、特別のことは何もしないでほしいと言っておいたのだ。この晩妻も、退職とか会社とかいうことを一切話題にしなかった。

退職してしまおうと現金なもので、太郎は身も心も非常に元気になった。そしてこの充電期間中に何か大きな挑戦をしようと思え、あれこれ考えをめぐらせた。

その計画の一つに徒歩旅行というのがあった。太郎は以前から、定年になったら最初にやるものとしては時間に囚われずにする旅行が最もふさわしいと考えていた。なにも定年にならなくても、時間が出来た今がチャンスではないかと太郎は思った。

期間は二週間くらいたっぷりかける。会社勤め中はこんなに長い休みをとったことはなく、旅行は好きであつたが二、三泊もすれば大きな旅行であつた。

コースは、自分の住んでいる広島より西の中国地方一周というのがすぐ頭に浮かんだ。毎日何十キロか歩いて、夜は行き着いたところで宿を取る。よし、これでいこう。太郎は早速道路地図を開いて、詳細な計画作りにかかった。

コースは、まず中国山地を越えて島根県の浜田で日本海側に出る。山陰道をひたすら西下して下関に至り、今度は山陽道を東上して広島まで戻る。一日

四十キロから四十五キロ歩くと二週間でこのコースを完結させることができる。太郎はだいたい一日分の距離を歩いた辺りで宿のありそうな町をその日の終点とした。どのあたりで昼食がとれそうかということも一応チェックした。中国山地越えでは途中に食堂などありそうにない区間もあり、非常食もリュックに入れることにした。予算は十二泊分の宿代と、いざというときに鉄道などで帰ってこられるだけの

交通費と若干の雑費である。

この計画には妻も賛成であつた。経費がそれほどかからないのと、昼間歩いて夜は宿だから安全だと思つたからである。何よりも二五年近く働き続けた後の思い切つた気晴らしとして、夫のやりたいということをさせてやりたかつた。

太郎は普段から週一回は十キロのジョギングをするなど、体力とスタミナには自信があつた。さらに

徒歩旅行を実行する前の約一週間は、かなりハードなジョギングをこなしてさらに体力をつけた。少々
の雨に降られても荷物を濡らさないようなリュック
も買った。

太郎は長期天気予報を確かめて四月下旬を出発日
と決めた。

その日は良く晴れて、天も彼の出発を祝福するか

のようであつた。計画どおりの朝六時ちようどに太郎は妻に見送られて歩き始めた。太郎の妻は足取り軽く歩いていく姿を坂の向こうに見えなくなるまで見送つた。姿がなくなると、これで二週間一人暮らしが始まるのだという実感が迫つてきた。

しかし四日目の昼前、太郎はタクシーで帰つてきた。運転手とのやりとりや車のドアが閉まる音で妻

が出てみると、太郎が足を引きずりながら玄関の方に向かっている。足の痛みは相当酷いらしく、非常にゆっくりしか前進しない。妻は慌てて荷物を引き取り、肩を貸して太郎を玄関に引きずり込んだ。太郎は玄関の上がりかまちに、しばらくは靴を脱ぐことも出来ないで坐っていた。ようやくギブスでもはずすように靴を脱ぐと、白い靴下の足の裏全面が血で赤茶色に染まっていた。

太郎は次のような顛末を妻に話した。

第一日は順調だった。天気が良く暑かったが、爽やかな風もあつて行程がはかどり広島市北部の飯室というところで予定通り昼食を食べた。しかし、すでに朝六時から約二十六キロ歩いており、昼食をすませて歩き始めるときにはかなり足が痛かった。特に足の裏は焼けるように痛んだ。歩き始めてしばらくすると痛み慣れてきて普通に歩けるようになって

った。それからさらに十八キロ歩いて初日の宿泊予定地千代田町に着いたときには、足の状態も体の疲労も限界かと思うほどであつた。それでも足を引きずりながらやつとの思いで宿を見つけて何とか一息つくことが出来た。足腰の筋肉痛とリュックの肩がひどく痛かつた。それに足の裏は広い範囲にわたつて水ぶくれになつていた。宿の廊下を歩くのも、まるで針の上を歩かされているようなおかしな格好で

しか歩けなかった。

翌日は、予報どおり朝から雨であつた。足はもちろん、身体全体の疲れがひどくてほとんど一晩中眠れなかつたような気がした。そのような浅い睡眠では体力は全く回復せず、気力も萎えて早くも予定外の休日となつた。予報ではその次の日は晴れることになつていたのでもう一日疲れを取つて、元気になつたところで好天の中を歩くことにしたのである。

その翌日、つまり出発してから第三日目は、晴れてはいなかったが雨は降っていないかった。足の裏はまだ痛かったが、あちこちの筋肉痛はなくなっており体全体の疲労感もほとんどとれていたので、朝六時に宿を後にした。歩き始めて間もなく雨が降り出して、この日は終日雨の中の行軍となった。天気予報は外れである。大朝町を過ぎて広島と島根の県境を越し、道はいよいよいかに中国山地を越えてい

るといふ感じになつた。真昼なのに雨のために薄暗い山の中の県道は車も少ない。ビニールの合羽をかぶつてたった一人で歩きつづけた。長く寂しい峠を越えて浜田自動車道の瑞穂インターの近くにある、冬はスキー場というところで昼食にありついた。食堂の主人の話だと、この日の宿泊予定地の旭温泉まではまだ二十キロ以上ある。明るいうちに着けるといいがと言う。最近熊が出たという話もあるのだそ

うだ。健脚なら何でもない距離だが、太郎が痛々しく足を引きずっているので心配してくれたのだらう。とにかく旭温泉の宿を電話で予約して、歩いていくので遅くなるかもしれないが必ず行くからと念を押した。いそいで昼食をすませて出発した。

雨は小止みなく降り続き三時ごろには夕方のような暗さであった。峠道では民家はなく、車もほとんど通らなかつた。太郎が雨の中をとぼとぼと歩いて

いると、パトカーが近寄つてきて、行き先を聞いた。熊が出ることもあるから明るいうちに着くようにしなさい、と注意していった。そう言われても可能なペースで歩くしかほかにしようがない。濡れた靴の中で足は感覚が麻痺したようになり、ちよつと立ち止まると、次に歩き出すときには足の裏が飛び上がるように痛い。朝六時から合計四十八キロを歩きとおして目指す宿にたどり着いた。足の裏はズル剥け

になつて、濡れたズツク靴の外にまで血が滲み出していた。

この日筋肉痛はほとんどなかつたが、足の裏はこれ以上歩けない状態であつた。その痛みで夜は眠れなかつた。シーツの足の辺りは血で汚れた。

翌朝、宿にタクシーを呼んでもらつてこの町の医院にいった。たとえ一日、二日休んでも旅行を続けるためには、適当な手当てをしておいた方がいい

と考えたからである。何とか日本海を見るところまでは行きたかった。

しかし、太郎の足を見た医者 of 診断は、新しい皮膚が再生するまで徒歩旅行などともないというものであった。

翌日、太郎は旅行の続行を断念して、宿の車で近くの浜田自動車道の旭インターまで送ってもらって高速バスで広島に帰ってきた。

これが、太郎が妻に話した顛末であつた。

ミスターフエイト登場

この旅行の失敗を見ていた太郎担当の死神が一仕事することをついた。この太郎担当の死神を仮にミスターフエイトと呼ぶことにしよう。ミスター

フエイトの考えでは、太郎の性格から必ず彼は同じような計画に再挑戦する。そのとき、今回の行動からもわかるように太郎はかなり無理をするであろう。だから太郎を死に追い込むチャンスはいくらでも仕組めると言うわけである。

ミスターフエイトは早速上層部に計画の報告をした。上層部からは、もちろん太郎はミスターフエイトの管轄している人間だから自由にやっつけていい、た

だし過去に二度しくじっているから今度はきちん
やるようにと注意された。二度のしくじりというの
は、いずれもミスターフェイトが太郎に仕掛けて果
たせなかつた、つまり太郎が死なずにすんだ事件の
ことである。

一度は二年前のことである。夜中に酒酔いの暴走
族の車が、道の端を歩いている太郎にぶつかつて車

の四人もろとも命を落とすというのがミスターフェイトの筋書きであつた。ところがミスターフェイトが、車の四人の命を召し上げようとしていた別の死神にきちんと連絡をつけていなかったために、車は太郎にぶつかる前に勝手に、彼が歩いているほんの五メートル手前の電柱にぶつかってしまったのである。太郎はすぐ後ろの電柱に激突して大破する車に仰天したが、僅かな差で自分は死なずにすんだので

ある。

もう一度は、その翌年つまり昨年のことであつた。ある寒い朝、車で出勤中の太郎はところどころ凍結した道路を、速度をぐつと落として慎重に車を走らせていた。そこへ対向車線を怖いもの知らずの、というより馬鹿な若者がかなりのスピードで走ってきた。ところが何に驚いたのか若者は突然ブレーキを踏んだ。凍結した道路では絶対にしてはならないこ

とである。若者の車は横向きになつたまま太郎の車の直前を横切つて左側の雪の畑に突つ込んで停まつた。実はこの若者もミスターフェイトの管轄する者で、道路凍結を利用して二人いつぺんに片付けようとしたのである。

他にも失敗が多くミスターフェイトは少しあせつていたのである。このときの失敗の原因は、ミスターフェイトの計算ミスであつた。普通神たちはこの

ような場合の計算、つまり車を衝突させるための速度や角度の計算のことだが、そういうことは間違つたりしないものである。ここでもミスターフェイトは評価を下げた。

太郎がミスターフェイトに目をつけられるようになったのは、四年くらい前からである。太郎は年令のわりに元気で、若い者と対等にテニスやソフトボールをしていた。むしろ二十台、三十台でも太郎よ

りスタミナのない者はたくさんいた。しかし、心臓にはやや不安があり、ときどき軽い胸痛などの自覚症状もあつた。それで、心臓で死ぬのならころつといけるからちようどいいなどとよく言つていた。それがミスターフェイトの耳に入つて、対象者のリストに載せられてしまったのである。しかし、心臓はなかなか死ぬほどの状態にならず、相変わらずテニスやジョギングに精を出しているのである。そんな

とき今度の徒歩旅行のことが持ち上がったというわけである。

このところミスターフェイトに限らず、生命を与える神が順調に仕事をしているのに対して死神たちの業績の低下は著しい。このアンバランスは神々の間でも問題になっている。戦争の回避や医学の進歩による伝染病の予防などで死神が大仕事をすするチャンスは年々少なくなっている。だから我がミスター

フェイトのような優秀でない死神はノルマに追われてきゆうきゆうとしているのである。

死神の仕事としては、当然病気の場合が最もスムーズにいく。したがって病気にかこつけて仕事をすすめるケースが最も多い。しかし最近では病気でもなかなか簡単にはいかなかった。身体だけは生かすつづける技術を人間が手に入れ始めたからである。病気でない人間の場合はそれなりの仕掛けと理由付け

がいたのでさらに面倒である。もつとも最近では、死神の中には無理を承知で強引な仕事をする者も増えてきた。理由付けなどなしでやってしまうのである。例えば、病院で回復に向かっている患者に、血液型の違う他の患者のために準備した血液を間違つて輸血させてしまつたりするのである。担当者は、準備された輸血の患者名と、実際に輸血をすることになつてゐる患者の名前をきちんと確認した。その

ときは間違いなかつたはずなのに、事故がおきてから検証するとはつきりと違う名前がよく見えるところに表示されているのである。なぜこれが見えなかつたのか自分でも説明がつかない場合が多い。したがって、疲れていたとかほかのことには気を取られていたといった、常識的に説明の付けやすい理由にされて済まされる。そして事件のあとしばらくの間は、医療の現場の問題点があれこれ議論される。しかし

本当の理由は人間にはわからない。人間の間違ひといふものは、信じられないようなことでも平気で起きてしまうものである。間違ひを犯した、実は間違ひえさせられたといつた方が正確なのだが、本人にとつては間違えた事實は認めざるを得なくても、まるで神隠しに会つたような、自分でも信じられないことが多いのである。このような幼稚なミスを犯させられてしまう医者や看護婦もとんだ災難だが、間違

えて輸血されたために死んでしまった患者の家族はもつと無念であろう。

このようにノルマの頭数さえあげればあとはどうなつても知らん顔という風潮が静かに広まっているのである。このような風潮を嘆く死神も少なくはないが、地球という限られた場所に増えすぎた人間、しかもその人間自身の手による自らの生きる環境の破壊がとどまるところを知らない今、面と向かつて

死神仲間の仕事に口出しするわけにも行かないというのが現実なのである。

先日も死神たちがこんな議論していた。

「最近人間どもは、天命に抵抗していたはずらに生き長らえる技術を競っている」

「だいたいやつらは生きるといふことの本当の意味を忘れてる」

「それはどういうことだ」

「わからないのか。生きるというのとは体と心と両方があつてはじめて成立することだろう。やつらの最近の生かす技術とやらは、もっぱら体を生かすことにしかなくていいじゃないか。そんな中途半端な技術を、専門家もしろうともみんなでありがたがつてすがりつこうとしている」

「それじゃあ生きることになつていないよね」

「やつらは馬鹿じゃないから、いずれは心も同時に生かす技術を手に入れると思うけどね」

「そのときには、われわれも喜んでその技術を認めてやってもいいけどね」

「とにかくわれわれ死神は、人間どもからハイエナのように嫌われ、恐れられているけど、やつらがもつと天命に素直になればそんなに怖がらなくてもすむのにねえ」

徒歩旅行リターンマッチ

さて、太郎の話に戻ろう。

太郎はミスターフェイトが予想したとおり、徒歩旅行のリターンマッチの計画を練り始めた。どうやら本気でもう一度やるつもりらしい。

前回は反省して一日の行程を約半分に減らした。

朝は九時ごろ宿を出て、午後五時前には次の宿泊地

に着くようにした。これによつて毎日の疲労が蓄積しないようにしたのである。それだけでなく、ウォーキング用の靴と厚手の靴下を新調して足元を固めた。また荷物の量を減らして肩にかかる負担を軽くした。前回は一日分の飲み物を出かけるときにリュックに詰め込んで歩いたが、実際に歩いてみると飲み物の自動販売機はかなり頻繁にあることがわかった。したがって持ち歩きは最小限にして、できるだ

け途中で購入するなど細かいことにも気を使った。

日程は前回と同じ二週間。一日に歩く距離を減らしたので西中国一周は出来なくなった。計画では山口県の日本海側の油谷町という温泉場を終点とした。そして、六月中旬に出発することにした。梅雨の真っ只中であるが、やる気の起きている今を逃したくないと考えたのである。それに、実は再就職のことも気にならないわけではなかったもので、この大計画

だけは早めに完成させておきたかった。また二週間目の次の日はハローワークに雇用保険の認定に行く重要な日なので、何があつても帰つてこなければならなかつた。

この計画を知つたミスターフェイトは、この徒歩旅行の間にいくつものチャンスがあることを喜んだ。神々の世界では、三年以内に一人の人間に対して三

回続けて失敗すると、その後二十年間はその人間に仕掛けてはいけないことになっている。それは死神の間で決められた不文律で、短期間に三回も死を免れた人間に対する敬意を表す意味で作られた。死神はこのように、しかるべき人間は尊重する。決して人間の敵ではないのである。ただし、最近ではこのルールを守らない死神もまれにはあるということだ。

ミスターフェイトにとっては太郎に仕掛ける三度目の正直ともいえる最後のチャンスなのである。ミスターフェイトはこの太郎の徒歩旅行期間中に複数の仕掛けを計画した。そもそも優秀な死神ならワンチャンスで十分なのである。幾つもチャンスがあると考えること自体ミスターフェイトの自信のなさが表れている。もつとも、人間の世界ではこのようにあまり優秀でない死神に担当されている人間のことに

を『運の強いやつ』といつて羨ましがられる。

もちろん、そのようなミスターフェイトの計画があることなど太郎本人は全く知る由もない。読者から見ると、常に太郎とミスターフェイトが隣り合つたように出てくるのでお互いによく知り合つた仲のような錯覚をするかもしれない。だがそうではないのである。よく刑事もののドラマに出てくる尋問室のマジックミラーのように、ミスターフェイトから

は太郎のすべてが見えてはいるが、太郎からはミス
ーフェイスが見えないだけでなく、その存在すら知
らないのである。

太郎とすれば、自分が知恵を働かせて下すその場
その場におけるさまざまな判断や選択が、危機の回
避につながることもあれば、逆に危険に踏み込んで
しまうこともあるのだ。それに偶然の運、不運も左
右するであろう。

リターンマツチの出発は六月中旬のある朝九時。雲は多いが時おり薄日の射すまあまあの天気であった。妻の、

「あさつてごろ帰ってくるかもしれないのよね」と言う冗談に送られて元気よく歩き始めた。ひと山峠を越えると広島市安佐南区に入る。ここからは広島市の西北縁をなぞるように歩く。第一目の宿泊地は安佐北区の飯室と決めた。まだ広島市である。

飯室に二、三軒旅館があることは、前回ここで昼食をとったときに見て覚えていた。

一日目のコースでは、交通量が多い上に歩道がなく、車道もあまり広くない嫌なところが一か所ある。一つは、出発して間もないところにある谷川沿いの曲がりくねった道である。それは地元の人が『七曲がり』と称するところで、国道だが急カーブが続く上に道幅が狭い。もう一箇所は飯室に近い鉄道と川

に挟まれた長い直線道路である。これも国道だが道幅が狭い。左側に申しわけ程度の歩道らしいものがあるが、その幅が狭くて、すぐそばを車が通ると歩いている者は肩をこすられそうな感じがする。おまけに鉄道脇の斜面の草が歩道に覆いかぶさっていて非常に歩きづらい。これらのことは、挫折した前回にも通っているので、太郎の頭にはあらかじめインプットされている。

死神との戦いの始まりー飯室の難所

ミスターフェイトは飯室に近い直線道路に第一の罫を仕掛けた。ミスターフェイトには『七曲がり』ではなく直線道路の方を選んだことに、考え抜いたという自信があつた。『七曲がり』は太郎が普段からよく通る道で、その危険性を熟知していること。また出発したばかりで足に疲れはなく、集中力もまだ

十分である。一方直線道路の方は、その日の行程の
終わり近くなので疲れている。道路が直線的なので、
ここを通る車はたいていスピードを出している。さ
らにミスターフェイトの自信を高めたのは、ちよう
ど太郎が通りかかる時間帯に事故歴の多い運転手が
乗った大型トレーラーが通過するといふ情報がある
筋から入手していたのである。

太郎は『七曲がり』を、右下を流れる谷川に咲き

乱れる草花を楽しみながら快調に通り過ぎた。ミス
ターフェイトが読んだとおり太郎はこの道を知り尽
くしており、特に右の川側を歩く往路では前方から
の車が早くから確認できて、さしたる不安もなく難
所を通過したのである。

しかし、もう一つの難所である飯室近くの鉄道沿
いの直線道路は、太郎が計画の段階からこの徒歩旅
行全コースの中でも最も嫌な個所のひとつとしてい

るところだ。ここで雨にでも降られたら、相当悲惨な行軍になることも想定していた。幸い予報に反して午後からは暑い日差しとなつた。それでも太郎は飛来する銃弾をかいくぐるような緊張感でこの道を歩いた。今回は道路わきの草が前回とは比べ物にならないほど伸びている。草が生い茂っていて歩く邪魔になることは、今回他の場所でもあつた。一月半の季節のずれが、こんなに歩く条件に影響するとは

想像しなかつた。太郎は歩道を諦めて、右側の白い側線の外を歩くことにした。しかし、側線から路肩までの幅がなく、ほとんど太郎は側線そのものを踏んで歩くことになった。大きなトラックが何台も太郎をなでるようにしていた。太郎は帽子が飛ばされないように右手で頭を抑えた。またすれ違う瞬間に風にあおられてよろめかないようにしつかりした足取りで歩いた。トラックの方も、対向車がないと

きは太郎が歩いてくるのを見て中央線よりによけて通り抜けてくれる。しかし対向車があるときはそうは出来ない。特に大きなトラック同士がちようど太郎の歩いてくるあたりで出会うと、ほとんど止まるようにしながら離合することが何度もあつた。

しかし、ミスターフェイトが当てにしていた事故歴の多い運転手の大型トレーラーにはついに出会わ

ないまま太郎はこの難所を通過した。

ミスターフェイトの計画はどこかで狂ったのだ。

トレーラーの通過時間にずれが生じたのが原因であった。これより三時間ばかり前、まだはるか先の場所です事故歴運転手は昼飯を食った。予想外の暑さで彼は普段より長く涼しい店の中でマンガを読んで休んでいたのである。これでミスターフェイトが計算したよりも三十分遅れて例の道路を通過することに

なつてしまふ。この三十分のずれによつて、問題の大型トレーラーが太郎とすれ違ふとき、太郎はすでに道路の左側にやや広めの歩道のあるところに差し加かつていたのである。

ミスターフェイトの計画では、大型トレーラーは運転手の性格から、多少道路が狭くてもかなりのスピードで走るはずであつた。道路の端を歩く徒歩旅行者などに遠慮はしない。もちろん轢き殺すつもり

で走るわけではないが、乱暴な運転をする者は何故か危険性を予知する能力が低い。だから乱暴な運転ができるともいえるのである。

ちようどこのトレーラーとすれ違ふときに太郎の方が、トレーラーがあまりにも近いところを通るのに気圧されてよろめき、かなりのスピードで通り過ぎるトレーラーの車体に接触して巻き込まれ、後ろの車輪に轢かれ、しかも車にひっかかっただまま引き

ずられるという無残な死に方をする事になつていたのである。ミスターフェイトの仕事としては、太郎がちようどのタイミングでよろめくように彼をコントロールすることであつた。

なぜ大型トレーラーはミスターフェイトの計算どおりの時間にこなかつたのか。これには大型トレーラーの運転手の人生を司っている神の意向が関わつ

ている。この神は、ミスターフェイトがトレーラーの運転手の行動に関する情報をチェックしているのを知って、なぜそんなことをするのかその目的を調べた。すると太郎を死なせるために利用するということがわかった。運転手担当の神は、いま考えている運転手の人生設計上、ここで人を轢き殺す事故をしでかすのはまずいと思った。この運転手にはまもなく初めての子供が生まれることになっている。そ

れをきつかけに乱暴な運転をやめるといふ筋書きを描いていたのである。この男は、運転は乱暴であつたが、朝早くから夜遅くまで実によく働いた。また臨月の嫁さんを優しく気遣つた。この神は彼のこういうところを評価してやることにしたのである。そこで太郎が安全なところまで達するのに必要な三十分という時間を運転手に稼がせるように手を打つたというわけである。

死神たちがある計画を実行するときには、関係する神に了解を求めてからするのが普通である。しかし、あまり死神仲間から認められていないミスターフェイトは、頼みに行くとは断られはしないかとの不安があつて、しばしば独りでことを進めようとするのである。

大型のトレーラーが走ってきたときには、太郎は

思わず道の端の草の中によけて通り過ぎるのを待った。トレーラーの運転手は対向車に気をつけながら速度を落として太郎のそばを通り過ぎていった。そのとき高い運転席から、運転している男が太郎を見下ろしたが、見上げた太郎と一瞬目が会った。太郎は、はっとした。あの男だ。

運転席から太郎を見下ろしていった男の顔は、長身のその男には寸法が足りなかつたのか、少し首を

曲げるようにして棺の中で目をつぶっていた青白い顔とあまりにも似ていた。男は笑いかけられるでもなく、睨みつけるでもなく、感情のない顔で太郎とわかつて見ていったように太郎には思えた。それは、太郎に会社を辞めようという思いを急速に強めさせた、あの首つり自殺をした男の死に顔だった。太郎は余りの唐突な出会いと不気味さに振り返ったが、トレラーは速度を速めながら走り去っていった。

かくして太郎は無事第一日目の宿泊地飯室に着いた。まだ時間も早かったので宿はすぐに見つかった。

第一の仕掛けに失敗したミスターフェイトは、第二のしかけに賭けることにした。それは、今度の旅行で太郎はあらかじめ予約せずに、行った先々で宿を探すやり方で大丈夫と判断していることに目をつけたものである。島根県に入ったばかりの中国山地

のリゾート地、瑞穂が第三泊目の予定地である。もしここで宿が取れないとどうなるか。太郎は前回朝早く千代田町を出て瑞穂で昼食をとり、さらに旭温泉まで歩いている。しかも傷ついた足で。だから、もし瑞穂で宿がとれなかったら、がんばり屋でスタミナにも自信がある太郎は、必ず旭温泉まで行けば何とかなると考える。そうなると前回と違って今回は、ここに着くのがすでに三時か四時だから、旭に

着くまでには当然夜道になる。この辺りでは、山菜取りの人が最近熊に出会っている。つまり山の中の道路を夜になつても独りで歩きつづける太郎を、熊に襲わせるというのがミスターフェイトの第二の仕掛けである。

ミスターフェイトのこの考え方は、またしても少しピントが外れている。このような変った死に方、つまり新聞記事になるような死に方は、各方面の

神々が何らかのかかわりを持つことになる。ミスターフェイトの最も不得意とする分野のはずである。その辺のことが彼には全くわかっていない。

しかしそのことを問題にする前にこの第二の仕掛けは実現不可能になってしまう。

飯室で太郎が泊まった宿での夕食のときである。

太郎はこの晩の唯一の客であった。六十近いという女将さんは太郎が食事している間中、その巨体を揺

すりながら何やかやと太郎に話しつづけていた。話題は娘の嫁ぎ先が外国だということや、以前客同士が喧嘩になつて、ビール瓶の底を割つて身構えると、ころまで行つたことなどであつた。その話のとき、そういうこともあるので田舎の宿では、部屋は開いていても飛び込み客を断る場合がある。だから必ず電話で予約しながら行つたほうが間違いないと忠告してくれた。これを聞いた太郎は、この日以降すべ

て前日の夜のうちに翌日の宿を予約しながら旅行を続けた。おかげで一度も宿にあぶれることはなかった。すなわち、ミスターフェイトの第二の仕掛けは初めから成り立たなくなつたのである。

太郎は、夜道ではないが熊が出没するという地域を歩くことになるが、昼間車が行き交う道路に熊が出る確率は高くない。いかに神といえども確率の低いことを起こさせるにはそれなりの周到な準備がい

る。わがミスターフェイトにそのような準備があるはずもない。

それから、友達の多い死神なら、宿の女将を担当している神にちよつと協力を求めて、あのような話をさせないことだつてできたはずである。もし、あの話の話を聞かなかつたら、太郎はその後も予約なしで旅を続けていただろ。仮にそうだつたとしても、熊に襲われるなど実現しなかつたかも知れないが、

少なくともこんな早々と計画が無効になつてしまふこともなかつたであらう。

太郎の徒歩旅行は、第三の仕掛けが仕組まれる青海島までは無事に進むことになる。

その後、第二日目以外は連日雨にたたられ、ほとんど毎日雷注意報が出されていた。また、時間雨量××ミリ以上通行止めというところも何箇所か通つ

た。車と出会うたびに立ち止まって通り過ぎるのを待つような狭い道路もあった。しかし、ミスターフエイトは自分が立てた第三の計画にのみ関心があるためか、それ以外の随所にあるチャンスには目もくれなかった。

だいたい人の死なせ方に凝るタイプの死神はえてしてこういうものである。ただし、ミスターフエイトの場合は凝るといふのとも少し違っている。自分

が思いついたことにしか注意力が向かないのである。

ゆとり道中—千代田町に行く

*ここから太郎の日記からの引用。

第二日目。飯室を出発、順調に歩き、ここは千代田町本地。旧道とバイパスが分かれるところ。前回

ここで最後の水を、歩道に座って飲んだ。前回は、旧道をずっと行って、千代田の交差点に出た。『蘇りの水』『へんぽこ茶店』右八〇〇メートルとある。行ってみよう。国道を右にそれて『へんぽこ茶店』と、いうのに向かっている。薄雲が広がっているものの、穏やかな日差しがあつて、静かに晴れ渡っている。さらに六〇〇メートルで『蘇りの水』だ。行ってみよう。

高速道路をくぐる。『蘇りの水』は、左へ四〇〇メートルとある。左というのがわかりにくい。『蘇りの水』が近づいた。上り坂。山に向かっているが、幅三、四メートルの舗装道路。道端に色とりどりの紫陽花が植えてある。日が当たっていて、ちよつと精彩がないが、一応きれいだ。アザミも咲き誇っている。こちらは元気。

高速道路の車の音を背にしながら、息を切らせて、

坂を上る。空気の臭いが気持ちよい。前方はもうすぐ山だが、その麓に『蘇りの水』なるものがあるのだらう。

『蘇りの水』に着いた。沢山の人が水を汲んでいる。風呂もある。自由に入れるらしい。『蘇りの水』をペットボトル一本だけ汲んでかえる。鬱蒼とした木々で小鳥が鳴いている。人々は、用意してきた大小の容器に何本も何本も汲んで、一輪車で駐車場の自分

の車まで運んでいる。私は、今度は坂道を下って国道に戻っていく。谷の向こう側に、三重の藤原岳のように大きく削られた山が見える。セメント会社だろうか。さつき汲んだ水を一口飲む。変な味はまつたくしない、純粹で美味しい。まだ冷たい。

アスファルト道路の端の方に蛇がいつびき、うんこのようにグニヤリと横たわっている。『蘇りの水』をちよつとぶつ掛けてみたがびくともしない。左の

向こうの方に馬が飼われている。小さいがいかにも牧場という風だ。馬が一頭だけ歩き回っている。わずかに牧畜の臭いが漂ってくる。何処でもかしこでも馬を飼っていた時代、あるいは西部劇の時代などは、いまの車のように馬がいたわけだろうから、どこにいつてもいつもこんな臭いが漂っていて、それが当たり前だったのだろう。馬がこっちの方を見ている。白っぽいなかなか大きな立派な馬だ。いまは、

一〇〇メートルくらい先に一頭いるだけだが、馬が
いっぱい飼われている所にいて、あるいは何かそこ
で用事をしていて、馬が追いかけて来るような、な
んかそんな夢だったのだろうか。夢を見たことがあ
ったのだろうか。急にそんなイメージが沸いた。

ここでも、このゆとりスケジュールは、道草が出来
てとてもいい感じだ。明日から予想される、雨の場
合はどうだろうか。

道沿いに、屋根をつけた塀のある古い屋敷がある。ここの塀は、上の方は漆喰だが、下の方は腰板になっていて、格子の引き戸がある。塀の中には沢山の庭木。塀の途中に幅五〇センチくらいの疎水が流れている。流れは澄んでいて、その両側は石垣が組んである。その疎水を塀が整然とまたいでいる。水の流れる音、小鳥の鳴き声。趣のある家だ。文学が生まれそうだ。

コンビニが続いてある。さつきは『ポプラ』前方には『セブンイレブン』。いかにも食べ物屋があつてもよさそうな道なのに、ない。

やつと道の左側に『歩歩路』という喫茶店がある。ログハウス風の洒落た、おもちゃのような店だ。ここで昼飯にしよう。

サラダ、コンソメスープ付きのビーフカレーそれに食後のミルクティーで八〇〇円。なお、今朝飯室

を出発するとき、ペットボトルの飲料を二本、三〇〇円で買った。これが今日のこれまでの全出費である。

昼飯をすませて歩き始めた。車がどんどん通る。本地郵便局。「ほんち」と読むのだそうだ。「名水を汲んできた」と言ったら、『蘇りの水』に限らず、この辺は水がいいところだと、さつきの喫茶店の人が言っていた。

『サンクス』に寄つて、いいパンツがあつたら買つておこう。『サンクス』の店内に入るので、手に持つているペットボトルをリュックに入れる。いかにも店内という感じに、女の声のアナウンスが録音さ
れている。パンツを三枚買った。宿屋で洗濯して乾かすのに、汚れて伸びたのではかつこ悪いからね。
では、橋を渡つて、あの王冠のパチンコ屋の辺りから入つていこう。右の坂を上つて行くと五〇〇メー

トルで、『こぼり薬師』、歴史民族資料館。往復一キロか。行ってみよう。先ほどの『蘇りの水』のときの八〇〇メートル、往復一・五キロを行ったんだから。

五〇〇メートル、大変な五〇〇メートルだった。一気に比治山くらいの高さを登ってきた。しかし、きれいな緑の道だ。木漏れ日があつて素晴らしい。風が、道路を歩いているときと違って、ぜんぜん気

持ちいい。

着いた。大きな蔵のような、新しくきれいな白壁。この新しく造られた建物の中に『古保利薬師』なるものが納められているようだ。きれいな境内である。誰もいない。この建物は、千代田歴史民族資料館。入ってみようか。歩くと玉砂利を踏む音がする。

『古保利薬師』のパンフレットを貰い、展示館から仏像までたっぷりと学芸員の方に説明を受けて、

いろいろ質問もして面白かった。一時間くらい経つたな。宿で洗濯物を乾かす時間が減ったが、来てよかった。

外に出ると、空には薄雲が広がっている。特に西の方は雲がだいぶある。やっぱり明日は予報どおりだと思う。いまの施設だが、説明によると、今は寺の名前をよその寺に譲って、ここに寺はない。ここは八重の商店街の人たちが記念に保存の場所を作っ

たのだということ、学芸員や、館内の説明テープで聞いたのだが、私は最後に、「寺はどれですか」などと訊いてしまった。まるでこれは、おばあちゃんと話していると、いま説明したのに何もわかっていなかったのだなあということが、それみたいな質問だった。こういうことってあるものだ。結構早口でぺらぺら説明されたからね。で、聞くほうが、あまり詳しくないことだから、寺のことなどあまり

頭に入っていないのだよ。これがオーケストラのことやブラームスの話だったら、聞いた端からきちんと前後関係も、ことの軽重も整理されながら頭に入っていくのだが。しようがないね。

*ここで引用終わり

このように無理のない行程のおかげで『蘇りの水』を訪ねたりちよつとした寄り道をして薬師堂を見学

したりが可能になった。そしてなによりも予定より早い時間に宿に着くことが多かったのもありがたいかった。疲れが癒せるというだけではなく、汗で汚れたものを洗濯して乾かす時間も十分に取れたからである。

つまりいたって快調であつた。

中国山地越え山陰沿岸へ

太郎は連日の雨にもかかわらず、一日も休むことなく歩きつづけた。前回くたくたになつてたどり着いた二軒の宿、すなわち千代田町と旭温泉では前回と同じ宿に泊まつた。どちらの宿でも彼のことを覚えていて親切に迎えてくれた。瑞穂では宿の夕食をとらず、前回昼食をとつてから旭温泉に向かつたと

きのレストランで夕食をとった。そこでも、自らも
平和行進などに参加したことがあるという主人が、
精をつけるようにとまたたび酒をサービスしてくれ
たし、昔からの知り合いのように歩くことについて
の話が弾んだ。

こうして太郎は、ミスターフェイトの画策などま
ったく知らぬが仏で順調な旅を続けた。むしろ毎日
のように出される雷注意報は気になった。常に雷に

対する不安を覚えながら歩いた。しかし、運よく雷には遭遇しなかつた。

五日目の夕方、予定通り浜田に着いた。前回旭町まで行きながら果たせなかつた中国地方横断が実現したことになる。前日予約しておいたホテルは駅前にあつた。太郎はカレー専門と看板の出ている豪華そうなレストランに入つて、当店自慢とあるカレー

ディナーで日本海到達を祝った。店内で立ち働く若いウエートレスたちを見て、太郎は久しぶりに若い女を見た気がした。この五日間女どころか、人そのものをあまり見かけなかったような気がした。実際山間部では、集落を通り過ぎるときでさえほとんど人影を見ることがない。ずっと天气が悪かったせいもあるが、田んぼには稲が植え揃っていても人影はない。たまたま出会ってもたいていの場合おじい

さんかおばあさんであつた。そのためか太郎にはこのレストランの女たちが、特別に美しくまた色っぽく見えたものだ。

日本海沿岸を西へ

日本海側を西に向かう旅も、雨の中の歩きとなつ

た。浜田を出てから岡見で一泊して益田までは、美保三隅の辺りで海岸線の道を歩いた以外はおおむね国道を歩いた。大都会のない山陰とはいえ、山越えの中国山地の中とは違って途切れなく店、工場、住宅などが続いている。

七日目の宿泊地益田には午後三時前に着いた。予約してあるのはホテルとは名ばかりの小さな宿であった。

太郎はここで自転車旅行の一人旅の若い女と夕食で一緒になり、親しくなった。お互い徒歩か自転車かという手段は違っているけれども、自分の力を頼りに一人で旅をするという共通点で、時間のたつのを忘れて話が弾んだ。

食事が終わり、宿の二階の廊下で、お互いの健闘を願う言葉を交わして別れとなった。女は握手の手を差し出した。太郎もこれを握り返した。太郎は、

あんなに意気投合しリラックスして話をしたのに、もう二度と会うことはないという感慨に襲われた。

翌朝出発の時に宿の主人が

「あの女の人からことづかりました」

と言いながら小さくたたんだメモ用紙を太郎に渡した。メモ用紙には名前と住所が書いてありその下に、「良い旅を祈っています。お気をつけて、」と万年筆の字で書いてあった。太郎は感激した。そ

して自分は彼女に何も言い送らなかつたことを後悔した。

その日の行程を終えたとき、二人ははるかに東西に隔たつた位置にいた。太郎はその夜、彼女を抱く夢を見た。

山陰道は益田からは国道九号線を離れ、国道百九十一号線が下関まで海岸線を走っている。といつて

も現在の百九十一号線は拡張され、小さな曲線は直線的に直されている。そのためかなりの部分で、海岸沿いよりは内側を通るようになっていて、それにくらべて旧国道は山陰本線の鉄道と並んで岬の先端まで文字通りぎりぎりの海岸線を通っている部分が多い。太郎は広くて歩道が整備されている新しい国道ではなく、できるだけそうしたいまは県道となつてゐる道を歩いた。道は狭いがほとんど車の往来も

無くむしろ静かで、景色を見ながら歩くには断然す
ぐれている。ただ雨の中を一人で歩いていると、孤
独を感じるくらいひとけが無い。先が見えにくいく
らいの土砂降りになると、道路上を川のように水が
流れて自分が谷底や海に流されてしまうのではない
かという不安に襲われる。それでも、一番恐れてい
た雷には出会わなかった。

八日目の宿は昭和のはじめからあるかと思わせるような落ち着いた建物であった。老夫婦がやっているようで、おじいさんが食事を運んできたりした。

翌日は第九日目。テレビの天気予報は、全体的に大雨雷警報が出ていると伝えていた。太郎がもつとも嫌な状態である。それでも朝九時に出かけることにした。空は重たく雲が垂れ込めているが、雨は落ちていない。この日の予定は、まず四キロほど岬の

先まで歩いてホルンフェルス断層とこのを見ることにしている。そのあともう一度宿の辺りまで戻つてから、西に向かうがこの日のコースはほとんどが岬回りの旧道を歩く予定である。

ホルンフェルス断層というのは見事な景観であった。ちようど老人ばかりの団体がバスでやって来たのと同じく合わせた。彼らは岸壁の上の展望台から見下ろすだけであつたが、太郎は断層面に手で触れる

ところまで降りて行つた。目の前に広がる日本海には、海面に届きそうに黒い雲が垂れ込めていて、海の色も暗い。海は凧いでいたが、良く晴れた日とは対照的に不気味である。そんな中で、断層の岩場で磯釣りをする人が二、三人岩の上に立って竿をたれていた。

そのあと太郎はもう一度宿の近くの須佐駅前まで戻ってから進路を西にとる。須佐駅前の喫茶店で早

めの昼食を食べた。ホットケーキとミルクティが美味しかった。そこからすぐ国道を離れて、旧道つまりいまは県道となっている岬回りの道を歩いた。歩き出すとすぐ、辛うじて持ちこたえていた空から大粒の雨が落ち始めた。太郎は合羽に身を包んでもくもくと歩きつづけた。ときどき展望が開けたところに出ても、たれ込めた雲と雨でもやっついて、近いところの海面がやっと灰色に見えるだけである。そ

れに合羽の耳のところ当たる雨音が大きくて、視
界だけでなく聴覚も閉ざされたような圧迫感に襲わ
れながら歩いた。激しい雨はかなり長い時間続いた
が、太郎が恐れていた雷は無かった。雨が小止みに
なつたときに、何度か遠くから雷かと思う音が聞こ
えてきたが、いずれも飛行機の音であつた。

この日は三時には阿武町の宿に着いた。太郎が宿
に入るのを待っていたかのように、雨脚が激しくな

り雷が鳴り出した。雷は、はじめ遠くでなっていたが、だんだん近づいて一時は耳を聳するような激しさで夕方まで続いた。太郎は、自分の運のよさをいままさらのように神に感謝した。

もともとの計画では、さらに二時間くらい歩いて名子駅付近で宿を取ることになっていた。しかし、昨夜電話で宿を当たったところ、名子付近には宿が無く、少し近すぎるが阿武町の宇田というところの

宿になつたのである。そのかわり翌日の行程がその分だけ長くなるのだがやむを得ない。

実は、ミスターフェイトはこの日の激しい雷の最中に、太郎は遮るものもない国道を一人で歩いていくはずだと思ひ込んでいたのである。予定通り名子に宿があればミスターフェイトの思つたとおりであつた。ミスターフェイトは、太郎の旅程がここまですべて当初の計画どおりに進んでいることから、太郎

の計画書に基づいて仕掛けを組んでいたのである。ミスターフェイトの段取りにしては珍しく、太郎がさらに歩きつづけていたら通るはずの地域に、思惑通りの時間に、幾つかの落雷があつたのである。ただ、そこに太郎はいなかつた。しかし雷の場合、場所と時間をピンポイントで歩いている太郎に合わせるのには、そう簡単ではない。特にミスターフェイトのような落ちこぼれの死神が気安く選ぶ方法では

ない。

当初の予定の場所に宿が無かったために、二時間以上も手前の町の宿になったのは偶然である。もちろん太郎も前の晩あちこちに電話してやむをえずそうしたのである。

この人間界でいう偶然も、やはり神の仕業ではないのか。ミスターフェイトは知らなかったのだから彼ではない。では誰なのか。神の世界でもこれはや

はり偶然としか言いようが無い。天候のような多くの地域や人々に影響のあることは、いくらミスターフェイトが天候の神に頼み込んでも太郎一人のために、落雷の場所や時刻を変更したりはしない。ミスターフェイトのような立場の神が雷を利用しようと思えば、ミスターフェイトの方で仕掛けたい人間を、落雷の場所に、時間どおりに送り込むしかない。これは相当腕利きの死神でないと成功する可能性は少

ない。ミスターフェイトにしてはむしろよくやった方で、惜しかったというべきである。少なくとも太郎に胸をなでおろさせたのだから。

青海島の戦い

ミスターフェイトが次に仕掛けの舞台として選ん

だのは青海島である。

太郎は、十一日目の夕方予定通り青海島の対岸にある仙崎の宿に着いた。仙崎は、昔は青海島北側海岸線にある大規模な奇岩群めぐりの観光船の発着場として、宿屋や土産物屋などで大変にぎわっていた。しかし今は、海峡をひとまたぎする橋が出来て、観光客は車でそのまま島の東北部にある奇岩を見下ろす展望遊歩道のところまで行く。そこにある大駐車

場に車を置いて、三十分か一時間遊歩道を回って青海島観光をすませる人が多い。観光船は今もあるが、船着場は昔にぎわっていた場所よりも数百メートル離れたところに、駐車場、売店などを備えた施設として新しくなっている。

太郎が泊まったのはこの地域で数少なくなつた宿の一つである。建物はおせじにも立派とはいえないが、中は広々していた。太郎はここに二泊する予定

である。この晩、客は太郎一人で広い風呂、広い食堂を独り占めであつた。女将さんと、嫁らしい若い女性との二人で太郎が食べきれないほどの海の幸を運んできた。二人とも愛想が良く、特に若い方は丸々と太っていて、はちきれんばかりの笑顔が快かつた。

翌日、この日は西進を一休みして青海島の中を歩き回ることになつている。太郎は基本的には島を一周したいと考えているが、道路がそのようについて

いるかどうかはつきりしない。太郎が宿の若い女性に聞いたところでは、現在一周道路を建設中で未完である。しかし、歩くのなら通り抜けられる程度にはなっていると言う。

太郎は橋を渡って島に入った。とりあえず島の西側から回ることにして歩き始めた。途中農作業の人に聞くと、工事中の一周道路は途中で行き止まりになっっていると教えてくれた。太郎が、歩きでも通れ

ないのかと念を押すと、いって行けないことは無いが、と曖昧である。太郎はやどの若い笑顔の女性の方を信じることにした。道は高山という島で一番高い山に向かっている。途中にオートキャンプ場があるという案内がたびたび出てきた。道が山の登りにさしかかるあたりで、太郎はもう一度農作業をしている人に、周回道路が途中で行き止まりかどうかを確かめた。そして、その場合ここまで戻ってこなく

ても、途中から島の南側に降りる道はないのかということも訊いた。その人は、はっきりとオートキャンプを過ぎたあたりで行き止まりになっているが、ちようどそのあたりに南側の寺がある辺りに降りる登山道があり、案内板があるからわかるはずだと教えてくれた。この説明が非常に明快だったので、太郎はこの辺の道路に詳しい人に違いないと確信した。とにかくオートキャンプ場なるところまで行くこ

とにした。

およそ一時間歩いたところにそのオートキャンプ場はあつた。島に渡つてからすでに二時間以上歩いたことになる。オートキャンプ場の管理事務所の建物はあつたがこの日は閉まつていた。太郎は自動販売機でスポーツドリンクを二本買い、一本はその場で飲み干し、もう一本をリュックに入れた。

太郎は、やがて行き止まりになると言われた舗装

道路をさらに進んだ。三十分ほど歩いたところで、ハイカーらしい男が降りてくるのに出会った。太郎は、この道が本当に行き止まりになるのかを確かめた。男は、行き止まりになるがそれはまだかなり先だと言った。そこまでは一時間かそれ以上かもしれないという。太郎は、寺に降りるといふ登山道はどの辺かも聞いた。男はそれも知っているらしく、いまのこの道がほとんど海岸くらいまで降りていった

あたりにあるという。ここから三十分以上先だと言
う。ただ草に覆われたり、崩れたりしていて通れな
くなっているかもしれないと付け加えた。太郎はと
にかく行ける所まで行くことにした。幸い曇っては
いるが朝から雨は落ちていない。

さらに一時間も歩いただろうか、それまで続いて
いた舗装が無くなった。太郎は、いよいよ行き止ま
りかなと思った。しかし、あるところは砂利が敷い

てあつたりして、いかにも工事中という感じで道は続いていった。しばらく行くと、道路わきの斜面で数人の作業員が草刈をしていた。さらに進むと、道路の中央に木の杭が打ち込んであり、その先にまだ未舗装の道が続いている。太郎は、もしかしたらこれは反対側から進んできた道路ではないかと期待した。ときおり見下ろせる北側の奇岩の海岸や、南側の集落の様子から、相当東まで来ていることが太郎には

わかつた。

まだずっと先まで続いているように見えた道路は、カーブを曲がったところで突然行き止まった。道の正面は削られた土の壁となっている。左側は海岸に急落下する谷で、鬱蒼とした木に覆われている。右側はこちらにもびっしりと木や草に覆われた斜面で、徒歩といえども踏み込めるところはどこにもない。

太郎は、これが何度か聞いた行き止まりかと納得

した。先ほど買ったスポーツドリンクを取り出して、半分ほど一気に飲んだ。来た道に戻るしかない。しかし、そういえば一度道は海岸線近くまで下がったが、その辺りにあると言っていた登山道、あるいはそれらしいものには気が付かなかつたことを太郎は思い出した。太郎は、きつと自分が見逃したのだと思つた。

歩き出そうとしたとき、雨がぱらつきだした。太

郎はビニールの合羽を着た。合羽はズボンと上着になつていて、ズボンをはくときにはいちいち靴を脱がなくてはならない。しかし、この旅で幾度となく繰り返してきたことなので、それほど面倒を感じなくなつていた。はじめのうちにはこれがひどく面倒で、少しぐらい降り出してもなかなか合羽を着なかつたり、逆に雨が小止みになつても脱がなかつたりした。しかし合羽を着て歩くのはとても暑く、体力の消耗

につながるので面倒がらずに脱着するように考えを変えた。それから、たとえ着てから二、三分歩いたら雨が止んだとしても、すぐ脱ぐようにしてきたのである。

しばらく歩いたところで、山仕事を終えて軽トラツクに刈り取った草や木の枝を積み込んでいる老夫婦に出会った。太郎は、寺の方に降りる山道があると聞いたが知っているか訊ねた。男の方が、その道

ならこれからもう少し戻ったところから左側の尾根に出る道があると教えてくれた。太郎は、礼を言つて歩き始めた。

十分も歩いたころ、前方の道の真中を一メートルくらいの蛇が悠然と道を横切っている。太郎は、足元のこぶし大の石を拾つて蛇に投げつけた。石は蛇にすれすれの所で止まった。普通なら速度を速めて逃げていくはずなのに、その蛇は瞬間的にとぐろを

巻き、転がって来た石に躍りかかると、素早く引いて身構えた。太郎は、家の近所で見かける蛇が、もつと大きなやつでもこそそそと逃げていくのを見慣れているので、この蛇の精悍な鬪争的態度に驚いた。そして、それがマムシだと気付いた。

しばらく石とにらみ合っていたマムシは、悠然ととぐろを解いて叢に消えていった。それも決して逃げるといふ感じではなかった。太郎は、マムシの消

えていった叢をよけるようにしてその場を通り過ぎた。そこを過ぎて、太郎が左側の尾根から右側の海岸にまで落ち込んだ谷筋を横切るように付けられた道を歩いているとき、先ほどの軽トラックの夫婦が通りかかった。太郎を認めると車を止めて、左の斜面を指差しながら、

「ここだよ、ここ。この斜面を登ってあの尾根に出て少し右の方に行くと、登山道の休憩所のような

つていて、そこに寺に降りる看板があるはずだ」
と大声で教えてくれた。太郎が見上げると、藪に覆
われた谷筋を三十メートルくらい登ったところが尾
根になつてゐる。

「蛇はいませんかね」

太郎は聞いた。

「いるかも知れんが、逃げるから大丈夫だよ」
と男は言う。しかし女の方が太郎の足元を見て、

「長靴じゃないし、やめといた方がいいね」

と太郎の心配を読み取ったようにいった。男はまだ、
「大丈夫だよ」

と繰り返していたが太郎が、

「今さつき蛇を見たばかりなので、やめときます。

わざわざご親切にありがとうございます」

と礼を言うのと、それ以上山越えを勧めなかつた。そのかわり、

「下まで乗っていくかね」

と言つてくれた。太郎は、丁寧に断つて、走り去つた。軽トラックの後から歩き始めた。しかし、数歩行つたところでもう一度山道への入口に引き返して、尾根を見上げた。尾根はすぐそこにあるように見える。太郎は道の無い斜面を見回して、登るときに足場が確保できるかを目で探つた。できるだけ地面が見えているところや、岩伝いに登れないかと斜面を

くまなく見回した。何だか行けそうな気がしてきた。どうしてもかなりの部分は叢に踏み込まざるを得ない。しかも、雨で草も樹も地面も濡れていて、いかにも蛇の好みそうな環境に見える。太郎は何十年も前に、親戚の者たちとこの島にきたことがあり、そのとき鎌首をきつと持ち上げて沼を渡る蛇を見た記憶が蘇った。やはり安全第一で行こうと、太郎はあらためて決意した。もう振り返らないようにして、

作りかけの広い道を歩き始めた。

太郎は、このときすでに朝から四時間近く使っており、しかもまだ青海島で見るべきものを見ていないような気がしていた。だから、もしトラックの夫婦がここだと教えてくれる直前にマムシを見ていなかったら、山越えをしていたに違いないと歩きながら考えた。なにしろ、教えてくれた尾根は本当に目と鼻の先に見えたのだから。それに、せつかく青海

島を探索するのに同じ道を二時間以上もかけて引き返すより、別の道を歩く方がよほど魅力的だったのにと心残りでもあつた。だが、まだ先のある一人旅であるから安全最優先であると割り切つたのである。

読者の皆さんはもうおわかりのことと思うが、ミスターフェイトの第三の仕掛けは失敗に終わったのである。

太郎はこのあと、橋の近くまで戻ったところで昼食を食べてから、こんどは島の東側に向かい、この日さらに六時間近く歩き回った。結局この島でみるべきものを見尽くしたという満足感を得ることが出来た。最後は降りしきる雨に打たれながら宿に戻った。昨夜同様貸しきり状態で、ゆったりと湯につかり、新鮮な魚や雲丹を腹いっぱい詰め込んだ。

ミスターフェイトの誤算は、太郎が道端でマムシに出会ったことに尽きる。なぜこんな手違いが起こったのか。

ミスターフェイトはこの日の太郎の行動については周到に検討した。同じ道に戻るのはとても我慢ならんと思えるほど時間をかけて行き止まり地点まで歩かせておいて、魅力的な近道に出会わせる。しかもその時点までに太郎が青海島らしい所をまだ見て

いないため、少しでも時間を節約したいという心理状態にさせておく。

珍しく前もってマムシを管轄する神には連絡をと
り、協力を取り付けていた。神々の中でも、マムシ
のような怖い動物を管轄する神はたいてい見るから
に強そうで荒っぽい。そんなときミスターフェイト
は愛想笑いで近づき、いかにもなれなれしい態度を
装って話しかける。内心びくついてゐる裏返しの状態

度である。

「青海島で一人の男を叢に踏み込ませるから頼みます」

と聞いた。

「おう、わかった」

と大声が帰ってきた。ミスターフエイトはそれ以上念を押ししたりして、機嫌を損ねられでもしたらこまるので、それだけで引き返した。場所も、時間も、

マムシを出現させる方法も細かく打ち合わせなかつた。ミスターフェイトは大いに気にかかったが、とてももう一度確かめに行く勇氣は無い。確認するなら、さつき頼んだときにきちんと言っておくべきだったと後悔した。いまごろ、いいかげんな頼み方で何もわからんとマムシの神は怒っているような気もしてきた。でも、相手も神なのだからいちいち説明しなくても分かってくれる筈だと、ミスターフェイト

トは勝手に解釈して自分を納得させてしまった。そして密かに、これが上手くいかなかつたら次がある、とやる前から失敗を容認する心の準備をしてしまっていた。マムシの神なんかに関わる計画を立てたことを後悔しさえした。

マムシの神は、見かけは怖そうでも実際は案外親切で、ミスターフェイトに頼まれたからには何とか協力しようというつもりになっていた。しかし、ミ

スターフェイトの計画の詳細がわからない。そもそも目的もわからなかった。マムシにその男をかませ、蛇の毒で殺そうというのか、それともただ脅かしたいのか、あるいは警告して注意を促したいのだろうか。マムシの神は、スターフェイトのようなおどした小物の死神は、一人の男が旅行中にマムシに噛まれて死ぬというような特殊な死なせ方はしないものだ、と常識的に解釈した。その結果、警告案

を採用したというわけである。

ミスターフェイトは、太郎が叢に踏み込む前に、太郎の歩く五メートル前方にマムシが登場したのを見て、第四の仕掛けが失敗したことを悟った。やっぱり、という気持ちであつた。マムシの神とのやりとり以来ある程度予測していたのであまりがっかりはしなかつた。また次があるという気持ちである。ミスターフェイトは自分の性格や能力が原因となる

失敗が多いことによるストレスを、諦めのよさで解消しているのである。

ミスターフェイトは、先日の雷の仕掛けがかなり良い線までいったことから、もう一度天候がらみの仕掛けを計画する。集中豪雨のために人も車も視界が悪く、前方が見えにくい中を走ってきた車に太郎がはね飛ばされて谷に落ちて死ぬと言うものである。

たしかにこの数日は梅雨前線の活動が特に活発になつており、激しい雨が降りやすくなっている。死神たちの中には、記録的な豪雨の中でたった一人の死者として自分の対象者を葬ることをやってのける者は決して少なくない。ミスターフェイトがやってはいけないという決まりは無い。管轄する人間の葬り方はそれぞれの死神に任されているのだ。

旅行も終盤—油谷温泉へ

旅行も終盤の十三日目、太郎は最後の宿泊地油谷温泉に向かつて歩いていった。国道で直接油谷温泉に行くコースはとらず、津黄漁港の龍宮の潮吹きをとおり、山の斜面に見事に作られている棚田の中の県道を歩いた。この日は仙崎を出たときから帽子が飛ばされそうな風と、頬に当たる痛いような雨に何度

も襲われた。また急に止んで薄日が射し始めたりもして、いかにも荒れた感じの空模様であつた。太郎は、その度に合羽を着たり脱いだりを繰り返しながら歩いた。午後、延々と続く棚田の斜面を歩くころには、小康状態などまったくなくなつて、連続的に激しい雨風が続いていた。

この日の距離は、最後の日だから何とか行けるだろうと計画段階から長くなっている。翌日は、油谷

温泉の近くの伊上駅から下関経由で広島市内の駅まで列車である。少々疲れが残っていても列車に乗っている数時間の間休めると考えたのである。

この日は昼食のチャンスを逃して、携帯の栄養食品だけで間に合わせた。これらの不利な条件が重なって、長時間激しく降り続く雨と風は太郎をそうとう痛めつけていた。だが幸いなことに、雷だけは注意報が出ていたにもかかわらず鳴らなかつた。この

たびの徒歩旅行では、太郎は最初から雨は覚悟しており、実際にこれまで毎日のように雨の中を歩いているので雨そのものには慣れてきていた。しかしこのように激しい雨と風は初めてであつた。

太郎はこの午後、ほとんど車に出会わなかつた。しかしいま一台珍しくのろのろと走ってきた乗用車が、太郎の五十メートルくらい前方で止まつた。このひどい雨の中で止まつて何をしているのだらう。

太郎は不思議に思った。自分に道を訊くつもりかもしれない。一時間くらい前に通ってきた『龍宮の潮吹き』というのが何処かを訊くつもりだなと勝手に想像した。それにしてもこんな天気のとくにわざわざ行くだろうか。太郎が止まった車のそばを通り過ぎてても何も訊かれなかった。車には中年の男女が乗っているのが見えた。そして太郎が通り過ぎてから、車のドアが開く音がした。太郎は、やっぱり何かを

訊くのだなと思つて、すぐに振り向いた。中年の女が土砂降りの中に傘をさしながら車を降りるところであつた。女は太郎の方には関係なく、ドアをバタンと閉めた。すると車は水を跳ねながら走り去つてしまつた。この辺りは、道の両側はもちろんのこと前後しばらく民家らしいものはまತ್ತたくないところだ。女はしばらくその場に立っていたが、太郎が立ち止まつて見ているのに気が付いて、車が走り去つ

た方角にとぼとぼと歩き始めた。足元は普通のハイヒールであつた。

太郎は、自分の進むべき方角に歩き始めたが、しばらくの間あれはどういうことだつたのかと考え込んだ。車の中で喧嘩をして、降ろされたのかあるいは女が自分から降りたのか。成り行きはそうであるにしても、あんな所で置き去りになつてどうするのだらう。ここではタクシーが通りかかることなどま

ったくないのだ。男がほどなく車を返してくるのだろうか。

太郎は知る由も無いが、実はこういう事情であつた。車の男女は、太郎が見たとおり二人とも中年であるが、夫婦ではなくいわゆる不倫の関係である。それも熱の冷めかけた関係であつた。この日、たまたま二人とも時間が取れるということで、岬を回るドライブの約束をしていた。しかし、今日になつて

みるとこの天候で、予報では夜まで悪くなる一方である。大雨洪水雷注意報まで出ている。女はこんな日に岬ドライブは止めようと言った。しかし、そのかわりのことを何か提案すればよかったのだが、男はデートそのものを止めようと言われたと受け取ってひどく気分を害した。男はむりやり岬ドライブを決行することにして、女も仕方なくそれに従った。出発しても車の中は楽しいはずもない。男はいらい

らして荒つぽく車を走らせた。雨で先が良く見えな
いようなカーブの多い道でもスピードを落とさずに
走った。女は、こんな危険な運転で一緒にあの世に
行くのは真っ平だから、降ろしてくれとヒステリッ
クに叫んだ。そのとき男は、車を止めて女が降りる
のに任せたのである。もちろん二人とも勢いに任せ
た前後見境の無い衝動的な行動で、人里離れた土砂
降りの中にハイヒールの女一人でどうすることも出

来ないなどということとは、考慮になかったし、考えるのも腹が立つつという状態だったのである。

一方太郎は顔に吹き付けてくる激しい雨のために、まともに前も見られない状態で歩いていった。もし喧嘩をしながらいらいらして集中力を欠いた運転の車が突然カーブを出てきたりしたら、はね飛ばされても一つも不思議でない状況であつた。はねた車さえ、跳ねたことに気付かないのではないかというほどで

あつた。太郎が叢の中にでも飛ばされて死んでいたら、それこそ翌朝新聞配達の人が発見したというよ
うな、よくニュースなどで聞くようなケースになり
かねない。太郎にとって幸いしたのは、女が降りる
と言い出したことであつた。

このあたりの男と女のやりとりは、二人を管轄す
る神の操作による。二人の関係をこれからどのよう
に展開させるかというシナリオに基づいているので

ある。

ではちようど太郎の歩いているところで車を止めたのは単なる偶然だったのか。いや、偶然というより、最も雨の激しいときという条件と、喧嘩のなりゆきとのタイミングを見計らつて、この神がそうさせたのである。太郎ともミスターフェイトとも関係ない。では、ミスターフェイトはこの神と打ち合わせをしなかつたのか。

打ち合わせをするにはしたが、自分の扱う不倫の男女の関係にとって重要な局面のためにミスターフエイトは無視されたのである。

雨と風は一向におさまる気配を示さなかつたが、太郎は着実にこの日の目的地に近づいていた。大きな交叉点の道路案内板に国道まで五キロとあつた。太郎はこの日の午後雨がひどくなつてからずつと、

目的地までどれぐらいかをわからないまままで歩きつづけていた。五キロといえはまだ一時間はかかるし、国道に出ても宿までは若干の時間は必要だろう。しかし、太郎にとって目途が立ったことは確かで、大きな安堵が体中に広がった。それと同時に太郎自身予期しない感慨がこみ上げてきた。そのとき涙が流れたような気もしたが、相変わらず顔に吹き付ける雨で太郎にもはつきりとはわからなかった。

何はともあれ、雨以外の点では無事といつていいだろうが、太郎は油谷温泉の宿についた。この旅行中では、萩で泊まった厚生年金の宿とともに最も大きな宿であつた。

あまりに濡れ鼠のようになったので、太郎は合羽をロビーに入る前に、風の強い玄関先で脱いだ。合羽を脱いでも、吹き込んだ雨と、長時間合羽を着て歩いたための汗で、着ているものは合羽がないのと

同じくらいずぶ濡れであつた。濡れ鼠の太郎は、立派な絨毯が敷きつめられた廊下にぼたぼたと雫を落としながら、部屋に案内する和服姿の仲居の後を歩いた。

部屋に入るとすぐに、太郎はバスルームに飛び込んで、濡れているものを全部脱いだ。素っ裸で着替えを取りにバスルームを出ると、さっきの和服の仲居がまだお茶を入れたりカーテンを開けたりしてい

る。彼女は飛び出してきた太郎にびっくりして、

「すみません」

といつてあわてて部屋を出て行った。太郎は、一日中雨に濡れて縮みあがったものを見られたと思い、ひどくきまりが悪かった。

仲居が出て行ったので、太郎は素っ裸のままリュックから着替えの下着を取り出した。旅行中はじめてリュックの中にまで雨が染み込んでいた。太郎は

リュックの中身全部をテーブルや椅子の上に広げた。ほとんどのものはそれぞれビニール袋に入れてあるので濡らさずにすんだが、道路地図などいくつか直接に入れてあつたものはどれも水濡れ被害を受けた。ビニールの紙ばさみに挟み込んであつたレシートや、見学したところの説明チラシなどもすっかり濡れてしまった。その中に一緒に挟んであつた益田で会つた自転車旅行の女の住所は、青いインクのしみだけ

になつていた。もう二度と連絡をとる方法はなくなつてしまつたことに、太郎は大きな喪失感に襲われた。しかし、ホテルの大温泉浴場で顎まで浸かつて一日の疲れをお湯に溶け出させている時、ふいに益田のあの宿に訊けばわかることに気付いた。風呂から上がると急いで部屋に戻つて、早速益田の宿に電話をかけた。電話には例の主人がすぐ出てきた。太郎が宿泊時の礼を述べ、その後の旅の様子をかい

まんで話したりしている間は、主人もとても上機嫌で次々と話を続けた。しかし、自転車の女の住所と名前を訊きたいと言うと、急に改まった調子になつて、それはいくらお客様でもお教えできないという。宿の主人が宿帳の記載事項を警察でもない者に教えないのは正しい行いである。太郎は諦めることにして、宿の主人にもう一度礼を言つて電話を切つた。

ミスターフエイトは、さすがにチャンスが残り少なくなっていることを感じずにはおれなかった。このところまったくノルマを果たしていない上に、この十三日間というものの太郎にかかわっていて他での仕事をしていなかった。ミスターフエイトはつくづく死神という役割が嫌になつてきた。

もともとは自ら選んだ道であつた。気が弱く、馬鹿にされたりいじめられたりの子供時代をすごした

ミスターフェイトは、成人して役割を選ぶときに、自分がやるのは死神以外に無いと考えたのである。人の運命を直接我が手に掴んで、自由自在に翻弄できるのだから彼にとってはこれほど魅力のある役割は無かった。しかし、実際にやってみると結構大変であった。どの人間に取り付くかは、自分で自由に選ぶことができる。選んだ人間を、いつどうやって人生を終わらせるか、あるいは終わらせないかは自

由である。ただ前にも書いたように、三年以内に三回死なせるのに失敗すると、その後二十年間はその人間を死なせることが出来ない。これが唯一のルールである。しかし、自由であるということは、自分で考え、自分で決め、自分で必要な段取りを整えなくてはならないと言うことである。だから、他の神々と上手くやっついていけないと仕事は出来ない。このことをミスターフェイトは、役割を決めるときに読み

違えた。神の世界では、一旦選んだ役割は永遠に続く。死神に死はないので文字通り永遠に続くのである。最近は、役割を果たさないうで平然としている死神が増えている。取り付く人間は決めても、手を下さないのである。ひどいものになると自分が選んだ人間を忘れてしまっているという死神も珍しくないという。それほど凡庸な死神にとって仕事がやりにくくなっているのである。それに比べれば、我がミス

ターフエイトは真面目な方である。

この世界でも、力のあるものだけが美味しい仕事を独り占めして上手い汁を吸っているのである。

さて、ミスターフエイトは残り少なくなつたチャンスをとかもものにしようと思はせている。あとワンチャンスだとミスターフエイトは考えた。

よせばいいのに、とてつもないことを思いついた。

鉄道で広島へ

太郎は、油谷温泉の大きな宿で最後の一夜を過ごして、翌日は鉄道で広島まで帰る。そして広島郊外の駅から自宅までの二十キロあまりをラストウォークと決めている。山陰地方は翌日も前線の活動が活発で大雨の予報であった。いつそのこと崖崩れで列車もろとも土砂に埋めてしまおう。ミスターフェイ

トは、自分でこの壮大な思いつきに感動した。

前にも書いたが、このように多くの人間に関わる仕掛けは一人の死神では実行できない。非常に多くの人々や物に関わるからである。こういう場合はたいてい神々の会議に提案され、各方面の協力を得る必要がある。大災害や大事件ほど格上の会議での話し合いが必要になる。逆にすでに決定されている事件に、ある人間を巻き込むことはそれほど難しくな

いし、手続きも要らない。

いま、山陰本線で大雨のために土砂崩れが起き、列車が飲み込まれて犠牲者が出るといふ企画はなかつた。ただ大雨のためにダイヤが乱れて、いくつかのささやかなドラマが展開される程度のこととが仕組まれているに過ぎなかつた。だから太郎を列車に乗せても、ミスターフェイトが期待するようなことは何も起こらないのである。ミスターフェイト自身そ

のことはわかっていた。しかし、そんなことでもして仕事をしている格好をしていなければ落ち着かなかつたのだ。

翌朝、太郎が乗った列車は、たしかに大雨のためにダイヤが大幅に乱れた。こうなると単線の山陰本線は、上り列車との離合の絡みもあつて、事実上無ダイヤ状態に陥る。線路などは大雨の被害を受けて

いなくとも、徐行などでダイヤが乱れだすと他の列車にもたちまち影響がでる。ダイヤの乱れが、さらなるダイヤの乱れを生んでいくのである。太郎は急ぐ旅ではないが、あんまり遅くなると広島についてのラストウォークが夜になってしまうことを心配した。やはり危険の多い夜は歩きたくない。

ミスターフェイトは、一応列車災害で太郎の人生をドラマチックに終わらせることを計画した。計画

したというより、夢想したといつた方が当たつてい
るかもしれない。つまり列車災害を期待したのであ
る。ミスターフェイト自身、いきなりそんなことを
言い出してもすぐに実現することなどあり得ないし、
かえつて物笑いの種にされると思った。だから直接
災害の神のところに出向いて説明することはせずに、
メモを下役に届けさせたただけであつた。メモを見た
災害の神は、一応そのような災害の企画が存在する

のかをしかるべき部署に問い合わせた。そのような災害については誰も知らなかつたので、上役は無視することにした。こんな大きな計画を、メモだけで、それも他人にことづけるなどもつてのほかだからこの処置は当然であつた。

死神、太郎計画断念

ミスターフェイトは、この無謀な仕掛け案が思つたとおり不発に終わったことで、今回の徒歩旅行をねらった太郎計画を断念した。そんなにやけにならなくても、太郎のラストウォークに目をつければ、もう少し実現性のある仕掛けも組めたというのに。例の『七曲がり』を登っていくところは太郎自身相

当危険と感じていたからである。

実際に『七曲がり』にさしかかった太郎は、この徒歩旅行の最後の一時間を切ったというところに来て、大変な緊張の中を歩いたのである。

十四日前に出かけるときにもこの『七曲がり』を通ったが、そのときは谷川側が右側であり、太郎はそのガードレールに添って歩いた。前にも書いたが国道ではあるが、乗用車が離合できる程度の道幅し

かなく、歩道はない。もちろん『七曲がり』と呼ばれるのだから、くねくねと曲がりくねっている。だから車がくるたびに太郎は慎重にやり過ごすようにして歩いた。ただ川側を歩く場合カーブで対向してくる車は、車からも太郎からも早い段階から相手の存在を確認できる。したがってやってってくる車の大きさなどに応じて、注意の仕方を準備できるのである。一方、山側が右側になるとカーブの向こうは、カー

ブミラーに頼るしかない。しかし、谷底のようなあまり明るくない道で岩肌に沿って歩いて来る一人の人間を、車からどれくらいカーブミラーの中に発見してくれるか非常に心もとない。実際、内側いっぱいにはカーブを曲がってきてから初めて太郎が歩いているのに気付いて、慌てて中央よりにハンドルを切る車に何度もあつた。対向車があるときには関係者みんなが非常に危険である。太郎は、左側でも川

側を歩くことも考え迷ったが、後ろからすれすれに
追い抜かれるのも怖い感じがして、結局右側歩きに
したのである。太郎は、カーブミラーに目を凝らし、
向こうからやってくる自動車のエンジン音に耳をそ
ばだてて歩いた。しかし坂を下ってくる車のエンジ
ン音はあまり大きくない。特に乗用車は聞き取れな
いことがしばしばあった。

このような右カーブはこの区間に五つある。太郎

がその最後の右カーブにさしかかったとき、突然目の前に紺色のスポーツタイプの乗用車が現れた。かなりのスピードであつた。運転しているサングラスの若い男は、太郎に驚いて中央線の方に急ハンドルをきつた。太郎もびっくりして、岩肌に背中をつけるようにして避けながら、振り返つた。そのとき反対側からトラックがエンジンをふかしながら坂を登つてきていた。登りの大型車はあまりスピードが出

ていない。スポーツカーは、今度は慌てて左にハンドルを切った。スピードが出ていたためコントロール出来ず、左側の岩肌に接触して大きな音とともに火花を散らした。スポーツカーは二、三十メートル走って停まったようである。またトラックも後続の車も停まって、運転していた人たちはスポーツカーのところへ寄っていったようである。『ようである』と言ったのは、太郎はその場を少しでも早く去りた

いという気持ちにかられて、急ぎ足で歩き去ったから、あまり現場の様子をはつきりとは見ていないのである。太郎は怖くなつて動悸は早鐘のように打ち、足には震えが来た。自分もこの事故に無関係でないことが一層太郎を怖くさせたのである。

太郎はそれがどの程度の事故だったのか、サンダラスの若者は怪我をしたのだらうか気にはかかったが知らないままであつた。翌日の新聞にも、その事

故らしい記事は載っていないかった。

寿命は丁度2021年まで確保！！

太郎は、ミスターフェイトのおかげで今後二十
間は生命を保証されることになったのであるから、
あのスポーツカーに轢かれる運命にはなかつたので

ある。

しかし、皮肉なことに別の形で太郎は試練を受けることになる。

『七曲がり』過ぎると二十分足らずで家に着く。いよいよ我が家が近づくと、太郎の頭の中は、さっきの交通事故のことから自分が家に着いた瞬間の状況を想像することになった。

「あさつて帰ってくるかも・・・」

と送り出した妻は、目的を果たして帰ってきた太郎をどう迎えてくれるだろうか。自分自身、家に入つた瞬間感激の涙になるだろうか。あのスポーツカーの一件がなかったら、家が近づくにしたがってもう少しは感じるものがあつたかもしれないと太郎は思った。

「ただいま」

太郎が玄関を開けると、妻が電話で話している声が聞こえた。

「いま帰ってきた。すぐ行くからそのまま待ってて何かあったらしい。」

妻が飛び出してきて、

「おばあちゃんが倒れた。すぐ一緒に行つて」これが妻の第一声であった。

太郎は、ただならぬ妻の様子にいそいで荷物を部屋におき、中から免許証と鍵だけを取り出した。妻は戸締りなどばたばたと出かける支度をしている。太郎はいま歩いてきたままの服装で、妻と車に乗り込んだ。十四日間置きっぱなしの車であったが、すぐエンジンもかかった。両親と言っているのは太郎の妻の方の両親である。その家までは車で十五分である。

電話は父からで、母は家の中で転んだのだが、ひどく痛がつていて、骨折しているかも知れない。だが本人が救急車は呼ばないでいいといつてきかないらしい。妻は電話の内容を説明したが、それ以上のことは妻もまだ何も知らない。なにしろ電話がかかったのが太郎が家の門を入ったときくらいだったのである。

ひとしきり母の状態を推測した話をした後、妻は、

「おかえり。疲れているのに悪いね。大丈夫？」
と聞いた。

車はさっきの事故のところを通ったが、もう何もなくなっていた。スポーツカーが傷ついたことは確かだが、事故としては大したことはなかったらしい。しかし太郎はその話はしなかった。妻はいまそれどころではないと思ったからである。

それからの一月は、入院と手術それに付き添いなど

で非常事態のような生活が続いた。

母は脳梗塞で倒れて、そのときに股関節を骨折したのだ。幸い脳梗塞の方は致命的なものではなかったように、とりあえず骨折の治療に専念した。しかし、骨折の手術で入院が長引き、入院している間に痴呆が進んでしまった。そのために骨折が一応治癒したあとも介護施設の生活となつたのである。

これはミスターフエイトの仕事ではなかったが、別の死神の仕掛けが人間の技術力で成就しなかったケースのひとつである。

母の一件は、太郎が死を免れた代償であるかのようなタイミングでもあった。

(完)

編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前についで

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットの風景

「オセロ」く手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

ミスターフェイト

2022年8月10日：第2版発行

著者：山中與隆

編集発行：山中伶子

表紙素材元：

<https://kage-design.com/>

リュックを背負った旅人 バックパッカー

<https://www.photo-AC.com>

土砂降りの雨

作者：Inushita

写真のID：1679163

© Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>
